

千利休の身分と人物像に関する一考察

趙亜男*

〔論文要旨〕

茶聖と称される千利休に関する研究は、わび茶の発展と定着に立って功績など茶の湯を対象としたものがほとんどである。また、豊臣秀吉の命令による利休の切腹に多くの注目が集められている一方で、この原因に関する定論がまだ出ていない。筆者は、茶人であった利休が当時の天下人であった豊臣秀吉に切腹による死を命じられたことより、利休の身分が単なる一介の茶人だけではないことに興味を持つようになった。そもそも、利休の研究においては、利休の身分や人物像を対象としたものは少ないため、本稿では利休の生涯を紹介したうえ、売買・文化・宗教・政治という四つの側面から利休の身分と人物像を考察してみた。

その結果、利休が商人・茶人・禅人・政治関係者という多重身分を持つていた重要な人物であることがわかると同時に、利休の人物像の多面性も伺うことができた。本稿は、わび茶の大成者としてこれまで神聖視されてきた利休について、無視されている身分と人物像の考察を通じて、利休の実像と社会的側面の解明を目的とした。

キーワード：千利休 身分 人物像

* ちよう・あなん、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程退学

一 はじめに

千利休は茶の湯の大成者として、日本国内はいうまでもなく、海外でも名が高い。珠光と紹鷗に継いで侘茶の発展と定着において大きな功績を立てたことから、茶の湯研究では論及せざるを得ない人物でもある。これまで、歴史学者である桑田忠親氏・芳賀幸四郎氏を代表とする研究者たちが千利休にまつわる実績を残しており、利休研究のための堅実な基盤を築いた。近年の利休研究においては、茶道の研究者である筒井紘一氏・谷端昭夫氏をはじめとする研究者が、相次いで利休関連の著書を出版し、新しい見解を示しつつある。

今までの千利休研究において、彼の茶の湯での功績の次に、注目を集めてきた事柄は豊臣秀吉の命令による切腹であろう。というのは、この切腹の原因が推測の域を脱しておらず、未だ定説がないことが一の要因であるのだが、利休の切腹にはそのほかにも特異事象が多くみられるからではないかと思われる。近年、福井幸男氏が利休の切腹の特異性を分析した論文「千利休の切腹の状況および原因に関する一考察(その2)」¹⁾では、利休の切腹の特異性について具体的に八項目の事象を提示している。

利休の切腹のことに付いて、『墨海山筆』の「利休伝」には、「一条戻り橋に獄門にかけ、大徳寺山門の上に置たる利休が木像を、柱を立て結付け、利休が首を鈕がけにのせて、木像に踏

¹⁾ 福井幸男「千利休の切腹の状況および原因に関する一考察(その2)―切腹状況における特異性の分析・検討ならびに切腹の公示罪状と切腹原因の真相解明に向けて―」『桃山学院大学人間科学』四十二号(桃山学院大学人間科学会、二〇一二年三月)三十七〜三十八頁。

せて曝さる。毎日の見物、群衆をなすといふ。」とある。当時の天下人であった豊臣秀吉に茶人であった利休が切腹による死を命じられたほか、一条戻り橋で梟首までされたことから、当時の利休と秀吉との関係が相当程度悪化し、利休が単なる茶人ではなかったのだろうと考えられる。

利休が一茶人と見なされてきたため、利休の茶人としての側面を中心にとらえた研究が多くなされてきた反面、当時の社会において、利休の人がどのような身分と人物像を持っていたのかということに関する研究はあまり見当たらない。そこで本稿では、利休文書をはじめ茶会記などの関連資料を用いて、利休の身分と人物像を考察し、彼の社会的側面を解明していきたい。

二 利休の身分の多重性

1. 利休の生涯

利休が生まれてから亡くなるまでの出来事について、『千利休由緒書』の利休の項に、「千與平衛と申候而堺今市町にて商家に罷成候其子與四郎と申候 而今市町にて商賣仕候處茶道をすき候 而後に武野紹鷗弟子と罷成剃髪いたし千宗易と名乗申候」²⁾と記されている。加えて『千家系譜』と『墨海山筆』に収録されている「利休伝」において、利休が大永二年(一五二二)和泉国堺納屋衆の一家の長男として生まれ、幼名を与四郎と称し、父は田中与兵衛(法名は一忠了専という)であり、母は月岑妙珍であるということが記されている。

天文七年(一五三八)、利休が十七才のころ、堺の有名な茶

²⁾ 高木文『茶聖利休居士記録』(一九四〇年)。

人であった北向道陳（一五〇四〜一五六二）を師として茶の湯の稽古をはじめ、二年後、北向道陳の紹介で、当時の名高い茶人であった武野紹鷗（一五〇二〜一五五五）の門下に入り、紹鷗に師事することになった。古田織部研究家である久野治によると、利休は茶の湯に接してから数年後の二十三歳まで、与四郎の名前を使っていた。^三

また、天文十四年（一五四五）、利休が二十四歳の時に堺の大徳寺第九十世である大林宗套から「宗易」の法名を授かる。そして天正十三年（一五八五）に行われた禁中茶会で「利休」という居士号を勅賜されるまで「宗易」を諱とした。

元龜元年（一五七〇）ごろ、今井宗久の推薦によって、利休は天下人である織田信長に茶の湯の道で仕えることになった。その五年後の天正三年（一五七五）に、信長の茶頭になったのだが、天正十年（一五八二）の本能寺の変で、信長が自害し、その後継の地位に就いた秀吉に奉仕することになる。その僅か九年後の天正十九年（一五九二）に、利休は秀吉の命令で切腹して生涯を閉じたのである。

前述してきた利休の生涯から概ねわかることは、利休が商人の家系に生まれながらも、青年のころから茶の湯の道に関わるなかで、大徳寺の禅僧とも交流を持ち、それを通じて織田信長と豊臣秀吉という二人の天下人に仕えていたことである。

さて、利休は茶人以外の面として、具体的にどのような側面を持っていたのであろうか。この疑問を解くために、さきに挙げた関係史料を用いて利休の活動について考察し、彼の身分の多重性と多面性もった人物像について明らかにする。

^三 久野治『千利休より古田織部へ』（鳥影社、二〇〇六年）一一五頁「千利休年譜」を参照した。

2. 商人としての利休

前節でも触れてきたが、利休は納屋衆の一家に生まれ、商人出身であることがわかるであろう。納屋とは倉庫業を生業とする商人の屋号であるが、現存している関連史料が少なく、制限があるため、利休の家族の商売についての詳細については、未だに定論が出ていない。

ここで当時の堺全体の経済状況について考えてみたい。応仁元年（一四六七）に起きた応仁の乱において、繁栄していた兵庫港が戦場となり衰退したことにより、その代替港として堺は繁栄することになる。

その九年後の文明八年四月十一日（一四七六）に、遣明船が堺港から出航したことをきっかけとして日明勘合貿易が復活し、堺は博多に比肩できる対明貿易の拠点に発展した。

その後、天文十年（一五四一）に明に対する出港が停止され、堺商人は大陸貿易のかわりに南蛮貿易を開始した。

貿易において、銀、銅、硫黄、刀剣、釜、薬缶、漆器、屏風、扇子等を輸出し、生糸をはじめ絹、綾、香木、鉄砲、硝薬などを輸入することで、堺商人たちは巨利を獲得し、それをもとで国内商業を支配する実力を持つに至った。

さて、利休は一体どのような商売を営んでいたのであろう。それを紐解くためにまず、信憑性が高い利休の書簡から考察してみたい。

芳賀幸四郎氏の研究によれば、「桑田氏の苦心の編著『利休の書翰』^四には、利休の自筆書状ないし古写と見なされるもの

^四 桑田忠親『定本 千利休の書翰』（東京堂出版、一九七一年）。

約百六十通を収録してあるが、そのうち約三十通の内容が直接あるいは間接に墨跡・掛絵・風呂・釜・花入・茶碗・茶入・茶杓などの道具の目きき・修理・周旋などに関係あるものである。^五 という利休と茶道具との関わり方についての記述がある。利休が織田信長と豊臣秀吉の茶頭として仕えていたことを鑑みると、これほど多くの茶道具に関わってきたというものは何ら不思議なことではない。次に挙げる具体的な例を踏まえると、茶道具は利休にとつて単なる茶会で用いられる道具というだけの存在ではないことがわかる。天正十四年あるいはそれ以降と推察される宛名不明の書状についてみてみたい。

急度申候。御知音の中に茶四斤、三斤半程の渡壺所望、金十にても、又十二、三にても、よきが所望候。さる御かたよりの御所望にて候。誰人も被尋候て、南北之内、御才覚専用二候。茶之前にて候間、急度ほしく候。一二つも所望候。又、金五つ計のも所望候。是もわたりにて候。恐々謹言。^六

利休

二月二十三日

宗易（花押）

「金子十枚でも、十二、三枚と引きかえでもよろしい。好ましい壺がほしいのです。さる御方の御所望です。だれにでもお尋ねになつて、堺の町の南北、いずれにても、さがし求めてい

^五 芳賀幸四郎『利休』(吉川弘文館、一九八九年十二月)二七七頁。
^六 桑田忠親『定本 利休の書翰』(東京堂出版、一九七二年)一五一号書状、三五五頁。桑田忠親『利休の書翰』(河原書店、一九六一年)一一〇号書状。

ただきたい。茶事を控えておりますゆえ、急いでお願いしたいのです。^七

この内容から、利休が誰かの依頼により渡来物の葉茶壺、いわゆる呂宋壺の入手に力を尽くしていることと、この依頼人がその壺の入手を切に望んでいる気持ちを読みとることができであろう。

また、天正十六年閏五月十九日と判定される博多の豪商島井宗室宛ての書状には、

就一軸之儀、御錠之趣、態以飛脚申入候。最前北野茄子に金子五十枚相副可被下之由、雖被仰出候、其方に茄子所持之段申上候之処、重而又、金子五十枚に般若壺可被下之由、御錠に候。右之壺者、利休自平野道是三十枚にとり申候。其方に壺無御用候者、於此方、金子三十枚に売候て、可進之候。今程にて、金一枚五百目宛に候。然者、式千貫に相当申候。縦少御存分に無之候共、関白様へ御用捨たるべく候間、御同心、尤候。^八

とある。これら二つの利休が出した書状の文面を見ると、利休は茶道具売買仲介者として茶道具の購入に関する交渉や斡旋を行う役割を果たしていたといえよう。

なお、利休を切腹に導いた一つの理由からも手がかりがつかめる。その理由とは、興福寺の子院多聞院の住僧英俊により書

^七 同上、二四九頁。
^八 桑田忠親『定本 利休の書翰』(東京堂出版、一九七二年)一八〇号書状、四二〇頁。桑田忠親『利休の書翰』(河原書店、一九六一年)一三〇号書状。

かれた『多聞院日記』の天正十九年二月二十八日の条に、

スキ者ノ宗益今晝腹切了ト、近年新儀ノ道具共用意シテ高直ニウル。マイスノ頂上也トテ歟、以外関白殿御腹立

とあり、また『晴豊公記』には

茶の湯道具新物共、くわんたいにとりかわし^九

とあるように、利休が安い茶道具を高値で売るといって売僧の営為があったことである。また、この資料の「関白殿御腹立」という文面から関白秀吉が利休の行いに対して立腹したことがよみとれる。しかし、利休の死の原因に関する先行研究の中では、利休が切腹を命じられた直接な要因として疑いを持たされている。

天正十二年九月のものと推定される宛名不明の利休の書状には、「次に聿を細々被下候とて、慶半喜候。同者、銀を御そへ候はは、猶々可然候。」と、天正十四あるいは十五年ごろのものとして推定される芝山監物あての書状の「雁塩引などは下され候でも入り申さず候。自然、銀子など候はば一折給ふべく候。」とあるように、利休が金銭利益に拘っている商人の一面もがみえる。桑田忠親氏は、これを利休の諧謔性^{一〇}の表現であると

^九 竹内理三編『増補続史料大成』第九巻（臨川書房、一九六七年）三三一頁。

^{一〇} 桑田忠親『利休の書簡』（河原書店、一九六一年）では「おもしろい手紙であるというのは、ここに、利休の諧謔性があらわされているからである。これについては、最近、鈴木半茶氏が特に力説して

論述する一方、芳賀幸四郎氏は「利休は、わび茶人というところから一般に連想され偶像視されているような、寡欲恬淡な隠者の存在につぎるのではなく、その半面、旺盛な営利観念とあぶらぎった俗物根性の持主でもあった」^{一一}ということを提示している。この両氏の観点は相反しているものであるようにみえるが、ある意味両立して利休はユーモアと実利を迫る両面を同時にあわせもっていたのである。また、芳賀が利休の商売について、「彼は複雑かつ幅の広い人物で、茶器の売買や周旋などで、相当の利潤をおさめていたことは事実であろう。」^{一二}と

いうことを参考に、茶道具の売買や仲介者として売買の中間で交渉や斡旋などの役割を果たしていたことがわかるであろう。この茶道具の商売について、永祿六年（一五六三）に日本で布教活動を開始した宣教師のフロイスは、三千、四千、五千、八千、一万クルサードの価のそうした器は多数あって、それらを売買するのは日常のこととなっています。しかしそれは公の場所では販売されるものではありません。^{一三}と述べている。これにより、当時の茶道具の売買は市場などのオープンな場での公的な取引ではなく、仲介者が入ることはあっても、売り買いすることは取引者同士で価格を取り決めるような私的な取引であったことが分かる。また、茶道具を必要としていた階層は、

いられるが、私も、氏の説に同感だ。銀子がほしいーなどというのも、これを諧謔とみれば、全く、問題はないはずである。」と論述している。

^{一一} 芳賀幸四郎『千利休』（吉川弘文館、一九八九年）二八二頁。

^{一二} 注一一に同じ。

^{一三} ルイス・フロイス『フロイス日本史』（中央公論社、一九八一年）、巻三、二七一頁。

が催した茶会は五十二会^{二四}ある。そのうち掛物の記述がある

一四

【利休茶会付録】

天文六年十三日	久政	天目
天文十三年二十七日	□久政	珠光茶碗
天文十五年正月十二日朝	宗湛	井戸茶碗
天文十五年六月十四日晝	宗傳	ヤキ茶碗
天文廿四年正月六日朝	達好	珠光茶碗
弘治二年十二月十九日	達好	珠光茶碗
弘治三年十二月一日	達了雲	珠光茶碗
永祿二年廿三日朝	開達	珠光茶碗
永祿三年十二月六日朝	紹佐	珠光茶碗
永祿五年五月廿七日朝	達陳久	建盞
永祿六年十二月一日朝	達好閑	天目
永祿八年六月四日晝	達巴閑	只天目
永祿九年九月十日晩	城達	圓悟
永祿九年十一月廿三日宵	宗仲	三閑
永祿九年十一月廿三日宵	宗二	閑通雲
永祿九年十一月廿八日朝	宗及	高麗茶碗
永祿九年十二月十日晩	及兌	高麗茶碗
永祿九年十二月十八日晩	市町衆	圓悟
永祿九年十二月廿七日晝	及新	高麗茶碗
永祿十年十月廿八日	及新	高麗茶碗
永祿十年十二月三日朝	宗二	高麗茶碗
永祿十年十二月廿四日晝	新五	建盞
永祿十年十二月廿六日朝	鉢屋紹佐	墨跡
永祿十一年正月三日晝	正通	久政
永祿十一年霜月十二日晝	叱仲	高麗茶碗
永祿十一年霜月十二日晝	道巴	建盞
永祿十二年三月五日朝	道巴	開山墨跡
	道巴	高麗茶

武士や貴族などの権力者に属する者や茶人であり、それらの人々は市などオープンな場で茶道具を購入することはなかったのである。このことを踏まえると、利休の茶道具の売買も所有者と購入希望者の間で行われる私的な売買活動でもあった。以上、利休が茶の湯の道の探究だけではなく、茶道具の売買も営んでいたことや、その際には一般商人のように営利観念を持っていたことについて論述してきた。このほかにも、利休が塩漬けの魚を営業し、堺の納屋衆として納屋を貸し付ける商売を行っていたことが、『千利休由緒書』と利休自筆といわれる譲り状からも窺い知ることができる。しかし、これ以外の関連資料が見当たらないためにその真偽は定かではない。したがって、利休の商売活動について、私的な茶道具売買を行っていたことは資料によって確信をもつことができるが、その一方で、茶道具以外の品物に関する公的な売買活動への関与については未だ不明である。

しかしながら、先に挙げた利休の書状の分析から、茶人利休だけではなく商人利休としての実像を浮かび上がらせることができたのではないであろう。

3. 禅人としての禅宗信仰の追求と商人としての名利の追求

ここでは、禅宗と利休との関連性について考察していく。墨跡から利休の禅宗信仰を考察するために、まず茶会記に収録されている利休茶会をすべて抽出して、茶会に使用された掛物の情報を収集した。筒井氏によると、信憑性の低いといわれている『今井宗久茶湯日記抜書』と『利休百会記』を除いて、『天王寺屋会記』、『松屋会記』と『宗湛日記』を調べた結果、利休

永禄十二年十一月廿三日朝	宗及	建蓋	天目
永禄十三年正月一日晚	宗二	及	高麗茶碗
永禄十三年二月三日朝	隆仙	道叱	宗及
永禄十三年十一月十八日朝	隆仙	道叱	宗及
元龜二年正月	道叱	道設	宗二
元龜二年十二月朔日	隆仙	道叱	宗及
元龜三年正月十四日晝	隆仙	道叱	宗及
元龜三年十二月廿七日朝	宗圭	道察	宗及
天正元年十二月廿八日朝	了雲	宗訥	及
天正二年十二月九日朝	叱訥	及	建蓋
天正四年正月十日	道叱	宗訥	及
天正四年七月廿九日晝	叱無	及	新太
天正四年十二月五日朝	宗無	及	伊勢天目
天正五年七月七日朝	隆仙	道叱	及
天正五年十月晦日朝	宗久	宗無	宗及
天正六年六月廿七日朝	二無	及	小鳥天目
天正七年正月廿六日朝	宗及	宗二	灰被天目
天正七年四月廿二日朝	道叱	宗及	宗二
天正七年九月一日晝	本住房	宗二	宗及
天正七年十一月廿日朝	宗及	道和	天目
天正八年十二月九日朝	宗及	宗二	東陽德輝墨跡
天正十年十二月廿八日朝	宗二	及	古溪宗陳墨跡
天正十一年九月三日朝	南宗和尚	海会和尚	宗及
天正十二年十二月廿九日朝	宗無	宗及	宗二
天正十三年正月晦日	宗二	宗及	瀬戸天目
天正十八年九月十日晝	球首座	宗湛	春甫文字
天正十八年十月廿日晝	宗湛	宗湛	黒茶碗
			黒茶碗

のは十会で、それらを年代順に並べると、「園悟」「園悟」「園悟」「墨跡」「開山墨跡」「墨跡」「輝東陽墨跡」「古溪墨跡」「虚堂墨跡」「春甫文字」となる。筒井氏は利休茶会に關しての考察を行っている。次に氏の論述を引用したい。

現在残されているのは五二会だけである(『利休百会記』と『今井宗久茶湯日記抜書』は除く)。この内掛物の記述があるのは九会だけであった。内容は「園悟」二会、「開山墨跡」一会、「東陽德輝」一会、「古溪墨跡」一会、「墨跡」三会、「春甫文字」一会だけである。九会はずべて墨蹟だったことになる。^{一五}

筒井氏と筆者の調査結果を比較すれば、「園悟」と「墨跡」の使用回数に少し相違がある。また、筆者の調査結果には「虚堂墨跡」の掛物の記述を含めたため、十会の記述を数えることができた。これは利休茶会に当たるかどうかはさておき、結果としては筒井氏が提示した通り、利休茶会に使用された掛物はすべて墨蹟であることがわかる。

さて、記録された墨蹟はどういうものであるか。少し説明したい。

「園悟」について、『山上宗二記』『墨蹟之次第』には、三幅だけ伝えられている。茶会記には、永禄五年五月廿七日朝、永禄六年十二月一日の朝と永禄九年十一月廿八日の朝に催された三回の茶会にかけられた記述^{一六}がある。このうち、永禄

^{一五} 筒井紘一『利休の茶会』(角川学芸出版、二〇一五年)一一二頁。
^{一六} 『宗達茶湯日記 他會記』と『宗及茶湯日記 他會記 道具拝見記』を参照。

五年と永祿九年の茶会記にはそれぞれ「廿五くたり在」と「五十六くたり有、字こまか也、らしいなく候、一文無」という詳しい記述がみられる。『山上宗二記』からは利休が三幅の「圓悟」墨蹟のうちの二幅を所持していたかは確定できないが、「開山墨跡」も含めれば、利休の「圓悟」墨蹟へのこだわりがわかるであろう。

また、天正八年から天正十八年まで、利休が「輝東陽墨跡」「古溪墨跡」「虚堂墨跡」「春甫文字」をそれぞれ一回ずつ使用した記録も茶会記に残されている。

次に、利休が主催した茶会には禅の世界を視覚化している墨蹟が多く使われている。そのため利休と禅宗との関連性を見るため、墨蹟の作者について考えていきたい。なぜなら、茶会で使用されているすべての墨蹟は禅僧によるものだったからである。墨蹟の作者について考察した結果、利休茶会に使用された墨蹟の作者は中国の宋代の禅僧圓悟克勤（一〇六三〜一一三五）、中国の元代の禅僧東陽德輝（生没不明）、大徳寺第百十八世住持である古溪宗陳（一一五三〜一一五九七）、中国の南宋時代の禅僧虚堂智愚（一一八五〜一二六九）、室町時代の禅僧春浦宗熙（一四〇九〜一四九六）という五人であった。室町・桃山時代、牧谿の唐絵や圓悟克勤墨蹟のような北宋から南宋の中国墨蹟が茶会の主流文化として愛用されていた。しかし、日本本土の禅僧の墨蹟、特に生存している古溪宗陳の墨蹟は利休が初めて使用した人物である。利休のその行為は革新的意義を持つものとなり、利休以降の茶の湯文化において影響を及ぼし続けた。

前文で挙げた墨蹟の作者は、臨済宗に所属した禅僧であるほか、日本臨済宗の大本山である大徳寺とある程度の関連を持つ

ていた。前節の「利休の生涯」には「利休は二十四歳の時に堺の大徳寺第九十世である大林宗套より「宗易」の法名を授かってから」とあるように、利休と大徳寺との関わりについて言及している。なお、「利休」という号は当時参禅の師である古溪宗陳から授与された。堺商人は戦国末期になると、禅宗より現世利益を肯定する日蓮宗に傾いたが、利休が日本の禅僧及び自分の師の墨蹟を使い続けたのは、茶の湯の道を探究するとともに、一貫して禅宗を信仰していたためではないであろうか。

このように、利休が禅宗信仰に徹し、その信仰の中で体現してきた茶の湯の姿勢が利休茶会の掛物から読みとることができるであろう。

ところで、利休と大徳寺との関係は必ずしも禅宗信仰に留まるものではなかった。以下の事柄からもその一端を知ることができる。室町時代の臨済宗大徳寺派の禅僧である一休宗純の詩偈集『狂雲集』の「泉堺衆絶交」^{一七}という二首の偈を見ていきたい。

耽利好名天澤孫 靈光失却大燈門 梨冠瓜履人疑念
伎倆富機報佛恩
参学之徒無道心 紅紫朱色以口金 忠言可逆人々耳
牛馬面前空鼓琴

これら二首の偈から、名利を求める堺衆の特徴と逆に名利に拘らない一休の境地に心をよせる堺衆もあったという。一休によつて堺と大徳寺の縁が深まり、それ以降、堺の南宗寺から大

一七 宗純『狂雲集』（民友社、一九〇九年）一四七頁。

徳寺住職に出世するというコースが普通になった。これは、出世の背後には堺財閥の支援があり、豪商たちのあとおしを出世の資としたからである。このような背景の下、皮革商の紹鷗と大林、魚商の利休と古溪との関係も前述の風潮の延長線上のものであると唐木順三氏が提示した。^{一八} その例として、天正元年（一五七三）古溪宗陳の大徳寺入山式には巨資を献金したり、天正十七年には大徳寺山門の造営寄進を図ったり、春屋の聚光院に永代供養料を納めたりことが挙げられる。

4. 鉄砲の調達者・仲介者としての側面をもつ利休

戦国時代、信長と秀吉は政治的・軍事的なために茶の湯を活用していた。この政治的・軍事的な目的とは軍需品の入手である。そのために、信長に倣って、秀吉も頻りに茶会を催して堺衆を招待していた。茶会記には、秀吉が開催した茶会で利休が招かれたのが十九回ある。このうち、正客であった回は九回ある。秀吉の茶会で茶頭を務めていた利休は、秀吉の茶会において優遇されていた。その理由は単なる彼の茶人としての身分によるものだけではなかった。その理由を辿るためには、信長の時代の茶会についてふりかえる必要がある。まず、竹本千鶴氏の『織豊期の茶会と政治』をもとに関連の箇所を引用したい。

（天正三年）四月八日、信長は本願寺側と手を結ぶ三好

一八 唐木順三『唐木順三全集』第六卷（筑摩書房、一九六七年）二二九頁。

山城守康長が守る河内高屋城を攻撃するが、同十九日に笑岩は松井友閑を介して降服し（『信長公記』）、十月十四日にいたり織田政権への服属の証として「天下無双ノ名物」である「三日月」の葉茶壺を信長に献上した。河内攻略に続いて、信長は、五月二十一日に三河長篠で武田軍に勝利した。その主因が大量の鉄砲使用にあることは周知の通りである。この時、鉄砲調達に従事したのは「奉行」の原田直政や長岡藤孝であるが、彼らの背後に津田宗及の姿が見えることに注目しておきたい。さらに、信長は八月十二日に岐阜を発ち、北国に向けて進発し、これを平定する九月まで一向宗徒との激戦を展開するが、この時も鉄砲の備品を調達した者の中に「堺衆」の姿があった。千宗易である。^{一九}

三人に関する記述の中で、利休は鉄砲の備品の調達者として言及されているが、その史実は千利休宛の織田信長の書状からもうかがえる。

就越前出馬鉄砲之玉千到来 遙々之懇志喜入候 猶原田備中守可申候也 謹言

九月十六日信長（黒印）

抛筌斎^{二〇}

一九 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（思文閣、二〇〇六年）二七九頁。

二〇 山本博文他編『織田信長の古文書』（柏書房、二〇一六年）二九八頁。

「越前出馬」からみれば、これは天正三年（一五七五）八月十二日の越前の一方向一揆征伐のための出陣であることがわかる。またこの戦いは、竹本氏が述べている利休が鉄砲の備品の調達者の任務を果たした戦いに当たるといえるよう。

利休の軍需品調達者の身分については、秀吉時代に入ると、関連資料が見つからないため不明である。秀吉茶会は、堺や博多の豪商を多く招いたほか、信長の旧臣や諸大名も多数招待している。秀吉は経済的あるいは政治的な目的をも持って茶会を開いたのである。このような茶会で、茶頭を務めていた利休は秀吉と茶会の客人たちの間で斡旋したかどうかは不明であるが、彼の書状からは政治活動を行っていたという姿の一端をうかがうことができる。

天正十二年（一五八四年）作成と推測される利休の自筆書状がそれである。この年に、尾張北部の小牧城を中心に秀吉と家康との小牧山合戦が行われた。三月から十一月にかけて半年以上わたったこの大合戦の際に、利休からも合戦について言及した書状が幾つか出されている。

その一つに、近江の西教寺と大阪市末吉勘四郎氏がそれぞれ所蔵している利休自筆書状では、小牧山合戦の講和に詳しく言及している。

【近江の西教寺所蔵】

久無音申候。仍、壺二ヶ少納言進之候。御渡所仰候。長々御氣も入、難申尽候。与風大坂へ御下向被申候。先度之御折紙、只今返進申候。次東国御平和之事、秀吉御存分に去六日二相済之由、態從御陣申來候。定而其元其聞可為同前候。猶追々可申候。

恐惶謹言。

拋筆斎

（天正十二年）
九月十二日

宗易（花押）

福 寿 院

【大阪市末吉勘四郎氏所蔵】

追申候。無事二御入と承候。秀吉御直筆御上様は無之候。三助さまは御むすめ子、家康はむす子、石川はうき、さかい左衛門尉兩人共、むす子にて候。人質を出候へと申候。扱まてに候。はやすみ可申候。

御心安かるべく候。昨日御城より堺へも此ふん申遣候へく候間、わざと人を遣候。其辺、丁へも此分可被仰候。かしく。

桑田忠親氏によると、これらの書状は、小牧山合戦の第一回目と第二回目の講和が暫定的に結ばれた時のものである。「次東国御平和之事、秀吉御存分に去六日二相済之由、態從御陣申來候。定而其元其聞可為同前候。猶追々可申候。」とあるように、利休は講和の内容について詳しく知りうる立場にあり、刻々と変化していく講和に関する状況について書状の送り先である福寿院に伝えたことがわかる。また、「三助さまは御むすめ子、家康はむす子、石川はうき、さかい左衛門尉兩人共、むす子にて候。人質を出候へと申候。」からも、利休は第二回目の講和の条件にも詳しいことが読み取れるであろう。これらの書状から、利休が政治機密について詳しく知っていたことがか、利休は秀吉にとって単なる茶頭だけではなかったことが推

測される。

また、天正十二年九月十八日、利休が尾張に転戦中の高山右近、富田左近、芝山監物ならびに古田織部の四人の武将に宛てて出した手紙には、

しかと申し入れておきます。無事敵を破ったとのことですが、気がかりで仕方なく、わざわざ秀吉様が飛脚を送って尋ねられたにもかかわらず、返事がないのはどうしたことでしょう。ご返事のほど重ねてお願いします。

九月十八日

とある。しかし、秀吉が四武将あてに出した信書に対する返信が届かなかったことから、秀吉の代わりに手紙を使って事情を尋ねる利休の姿がうかがえる。これによって、利休は政治機密に詳しいだけでなく、秀吉のために政治的仲介者としての役割を務めていたこともあったといえよう。具体的にどの程度まで秀吉の政治に携わっていたのかはこの書状のみでは判明しないが、秀吉の茶頭として利休は、秀吉が目指していた軍事的戦略と外交上の政策を把握したうえで、講和などの目的で催された茶会を成功させるために少なくとも講和の条件を伝達する役割をはたしていたことが推測できよう。しかし、利休を秀吉の「政治顧問」^{二三}と称する先学がいるが、そこまでいえるかどうかは確実な史料がなければ確定できないといえよう。

三 利休の切腹からみた利休の多面性

二三 加来耕三「商人から秀吉の政治顧問へ 千利休」『商エジャーナル』四七二号（二〇一四年七月）七十二頁。

天正十九年正月二十日ごろより、大徳寺山門の利休木像が問題になり、二月十三日、秀吉より堺へ追放令が下り、堺に下向し蟄居したが、二十五日ごろに突然秀吉より切腹の命令を下された。その後、辞世の偈と和歌と遺産処分状を書き、二十八日、聚楽屋敷内で切腹した。

利休が切腹を命ぜられた原因に関して緒説が伝わっているが、よく論述された項をまとめてみると次の通りである。

- ① 大徳寺山門の楼閣に利休自身の雪駄履の木像をあげた（木像事件）
- ② 私利欲のため安い茶器を高価で売るといふ売僧の所行があった
- ③ 秀吉が利休の娘を所望したにも拘わらず、利休がこれを拒否した
- ④ 利休の自負心と秀吉との内面的抗争が秀吉の怒りを買った
- ⑤ 豊臣秀長死後、豊臣政権内の政治闘争に巻き込まれて犠牲になった
- ⑥ ①の木像事件について、伊達家の家臣である鈴木新兵衛が、利休の切腹した翌日の二月二十九日に、国元の家老石母田景頼に送った上洛中の伊達宗政の近況を報じた書状には、「茶湯の天下一宗易、無道の刷年月連続の上、御追放、行方無く候。然る所に右の宗易、其身の形を木像に作り立て、紫野大徳寺に納められ候を、殿下様より召上げられ、聚楽の大門もどり橋と申し候所に、張付にかけさせられ候。木像の八付、誠に前代未聞の由、京中に申す事に候。」という記述がある。それが故に、これが利休を切腹させて死に至らせた直接の原因として伝わ

っている。

②は利休の商人像をよく反映する説として注目される価値があるにもかかわらず、経済的理由で利休に切腹の死を賜ったという考え方は危ういと思う。

③について利休と同時に茶頭の座についていた茶人今井宗久は、武野紹鴎の娘婿となり、紹鴎の息子である武野宗瓦との遺産紛争に勝利したため紹鴎の産業や茶器を受け継いだ。秀吉も同じ企図だろうと、利休は知っていたかもしれないが、秀吉がこの企図を持っていたことから利休の家財の膨大さが伺われる。

④について秀吉が嫌いだった黒茶碗を頻繁に使用したり、秀吉が望んだ婚約を拒否したりすることなど、秀吉に対する利休の内面的抗争が利休の政治野心の表現であるとよく論述されている。

⑤について茶道研究家である生形貴重氏は「秀吉が育てた官僚的な大名グループの台頭により、秀吉の天下取りを支える軍事的な役わりを果たす大名衆との間に亀裂を生み出していたのだ」^{二三}と述べている。官僚大名の石田三成たちが大徳寺と堺を攻撃した影響を受けて、利休が切腹に至ったことは周知の通りである。これにより、利休の政治色がより強くなるであろう。

四 おわりに

武士ではなく茶人としての利休に切腹を命じたことについては、大いに不思議に感じざるをえない。本稿では、利休の

二三 生形貴重「下剋上に生きた利休と大徳寺」『茶道雑誌』八十号（二〇一六年四月）三十頁。

身分と人物像の考察を試みてきた。その結果は次の通りである。利休は茶人としてわび・さびを探求する面が強調されているが、それ以外にも官利観念が強い商人としての一面もある。利休が茶の湯の道を探究するとともに禅宗信仰に徹している禅人としての姿勢が読み取ることができた。さらに、利休は織田信長と豊臣秀吉の茶頭でありながら、鉄砲調達者と政治的仲介者として軍事・政治的役割も果たした。

以上から、利休が商人・茶人・禅人・政治関係者という多重身分を持っていた重要な人物であることがわかると同時に、売買・文化・宗教・政治という四つの方面と関りを持っていた利休の人物像の多面性も伺うことができるであろう。

また、利休の人物像と性格については、歴史家である加来耕三氏の論文には、『南方録』『松風雑話』『茶話指月集』『茶道望月集』などの書には、いずれも、利休の傲岸不遜な言動が、少なからず紹介されている。加えて利休は、金銭に異常なまでの執着心をもち、利益のためには周囲の人々すら思いやろうとしない、守銭奴とみられても仕方のない痕跡すらとどめていた。^{二三}と述べられている。この「傲岸不遜」「守銭奴」から自負と吝嗇という性格を持つている利休の人物像が見られるが、これをそのまま信用できるかどうか問題である。

本稿は利休の身分と人物像について文献的考察を加えたものである。秀吉政権において重要な位置に務めていた利休は、なぜ切腹による死を命ぜられる悲劇に見舞われたのか。切腹の原因は利休の身分と人物像とどのような関係であるかは興味深いところであるので、これからの課題としたい。

二三 加来耕三「歴史の同時性（その三）天下人、秀吉を錯覚した千利休」『歴史研究』六四六号（二〇一六年）六十七頁。

千利休的身份与人物像考

赵 亚男

有关茶圣千利休的研究，主要集中在利休将闲寂茶发展并植根于日本上的贡献等等以茶汤为主题的内容等方面。其次，虽然千利休在丰臣秀吉的命令下切腹自杀也备受关注，但是，其原因至今未有定论。作为一介茶人的千利休被当权者丰臣秀吉下令用切腹的方式自杀这一点来看，利休的身份绝不只是一个茶人而已。由于本来，利休研究中关于其身份和人物像的内容就比较少，所以此篇论文中我想在介绍利休生平的基础之上，分别从交易，文化，宗教，政治这四个方面来考察利休的身份和人物形像。

此次考察，笔者除了了解到利休是一个集商人，茶人，禅人和政治关联者多重身份于一身的重要人物之外，也窥测出利休人物形像的多面性。一直以来，利休作为闲寂茶的集大成者一直是被神化视之的。基于此背景，拙论的目的在于通过对被忽略的利休的身份和人物像的考察来探究利休的真面貌与他社会性的一面。

关键词：千利休 身份 人物形像